

令和5年1月10日

保護者の皆様

昭島市立富士見丘小学校
校長 稲垣 達也

「ありがとう」と「おかげさま」で暮らしたい

輝かしい新春を迎え、心よりお慶び申し上げます。日頃より本校の教育活動に、ご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

今年の干支“癸卯（みずのとう）”は、「今までの努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍する」年とされています。「癸」は静かで温かい大地を潤す恵みの水を表し、十干の最後にあたるため、生命の終わり新たな生命の成長という意味を持っています。また「卯」は穏やかなウサギの様子から安全、温和の意味を持ちます。

去年は、新型コロナウイルス感染症の断続的な流行に加え、ウクライナへの残虐で傲慢な侵略行為により、世界中が翻弄され続けました。

今年、この未曾有の危機を乗り越え、初等教育の原点に立ち戻り、飛躍と向上の一年とし、新たな価値創造の歩みを着実に進めたいと考えております。

さて、新年にあたり、学校では子供たちに「ありがとう」と「おかげさま」という感謝の心の大切さをお話ししています。

私たちは、自分一人で生きているのではなく、多くの人たちに生かされています。そのことに気付いた時に出てくる感謝の言葉が「ありがとう」「おかげさま」です。

二つのお話をご紹介します。

盲亀浮木のたとえ 『仏説譬喻経』より

ある時、釈迦が、阿難（あなん）という弟子に、「そなたは人間に生まれたことをどのように思っているか」と尋ねた。

「大変、喜んでおります」と、阿難が答えると、釈迦は、次のような話をしている。

「果てしなく広がる海の底に、目の見えない亀がいる。その盲亀が、百年に一度、海面に顔を出すのだ。広い海には、一本の丸太ん棒が浮いている。丸太ん棒の真ん中には小さな穴がある。その丸太ん棒は、風のまにまに、西へ東へ、南へ北へと漂っているのだ。

阿難よ。百年に一度、浮かび上がるこの亀が、浮かび上がった拍子に、丸太ん棒の穴に、ひょいと頭を入れることがあると思うか」

阿難は驚いて、「お釈迦さま、そんなことは、とても考えられません」。

「絶対にないと言い切れるか」

「何億年掛ける何億年、何兆年掛ける何兆年の間には、ひょっと頭を入れることがあるかもしれませんが、無いと言ってもよいくらい難しいことです」

「ところが阿難よ、私たちが人間に生まれることは、この亀が、丸太ん棒の穴に首を入れることが有るよりも、難しいことなんだ。有り難いことなんだよ」

と、釈迦は教えている。

おかげさま 野村克也『野村ノート』

夏がくると冬がいいという、冬になると夏がいいという。
太ると瘦（や）せたいという、痩せると太りたいという。
忙しいと閑（ひま）になりたいという、閑になると忙しいほうがいいという。
自分に都合のいい人は善い人だと誉め、自分に都合が悪くなると悪い人だと貶す。
借りた傘も雨があがれば邪魔になる。金をもてば古びた女房が邪魔になる。
世帯をもてば親さえも邪魔になる。
衣食住は昔に比べりゃ天国だが、上を見て不平不満に明け暮れ、
隣を見ては愚痴ばかり。
どうして自分を見つめないか、静かに考えてみるがいい。
いったい自分とは何なのか。
親のおかげ、先生のおかげ、世間様のおかげの塊（かたまり）が自分ではないのか。
つまらぬ自我妄執を捨てて、得手勝手を慎んだら世の中はきっと明るくなるだろう。
おれが、おれが、を捨てて、
おかげさまで、おかげさまで、と暮らしたい。

人間は元来、「自分が、自分が、」という生き物です。でも世の中に「自分一人の頑張り」だけで達成できることなど何一つありません。自分を支え励ましてくれている陰（かげ）の部分を見ることが大切です。それを見ようとせず、感謝の気持ちがなければ、愚痴や不平不満、責任転嫁を生み出します。

「この世で最も不幸な人は、感謝の心のない人である」と言われます。何をしてもらっても当たり前で不平不満ばかりが出て、幸せを実感することができません。反対に、感謝の気持ちを心から「ありがとう」という言葉で表せば、相手も「喜んでもらえてよかった」と嬉しくなります。自分の幸せが他人の幸せになり、他人の幸せが自分の幸せになるのです。

それが「ありがとう」「おかげさま」です。

結びに、新しい年が皆様にとりまして明るく実り多き年になりますよう心からご祈念申し上げます、年頭のご挨拶とさせていただきます。